

太郎川公園再生基本構想

ぐっと よって ゆすはら

令和5年2月



— 目 次 —

【はじめに】	1
【前提として】	
■人口構成	2
■産業構成と町内総生産	3
【社会的背景】	4
【町の描く地域ビジョン】	5
【太郎川公園について】	6
【公園の現状と課題】	7
【人が資本であり資産】	9
【太郎川公園を使って実現したいこと】	10
■道の駅	11
■食事施設・宿泊施設	12
■キャンプ場	14
■アクティビティ	15
■湿生植物園	16
■学びの場	16
【太郎川公園に伴う地域への波及効果】	17
【スケジュール】	19
【参考】	21
【2030年新たな栲原人の人物像】	22

【はじめに】

中山間地域の多くは、いわゆる条件不利地域であり、交通面や産業流通面などいずれにおいても、そのハンデは大きい。その一方では、十分に活用しきれていない資源が多く残されており、梶原町もその一つの町である。

その賦存している資源を活用した観光産業は、潜在成長力の見込める分野であり、梶原町の生き残りをかける可能性のある分野とも言うことができる。

この可能性を可能性のまままで終わらせず、成長につなげていくことができるか否かは、今後の施策によるものであり、人口減少社会のなかでのローカル志向への変換期にある今を逃しては「子々孫々に幸せな暮らしをつなぐ理想郷・梶原へ」に向けた町の在り方につながらないとの思いがある。

「子々孫々に幸せな暮らしをつなぐ理想郷・梶原へ」の思いは、平成29年12月の町長就任当時から強く持っているものであり、高度経済成長期の物質的な充足や利便性だけを「幸せ」とするのではなく「多様な幸福」を暮らしの中で感じられ、人と共感しあえる心よりどころとして古くから慈しまれてきた自然とともに永続的につないでいく町づくりを進めたいという気持ちからである。

その思いを第7次「梶原町総合振興計画」の基本理念とし、第2期「まち・ひと・しごと創生総合戦略」とあわせた地方創生（町づくり）に取り組んでいるところである。

しかしながら、地方創生の背景にある人口減少に歯止めはかからず、人口減少に伴う影響は労働力（担い手）不足、町内需要の鈍化、経済停滞、商店等廃業といった町の魅力低下となっており、今後においても、学校の存続を含めた教育、医療や介護・福祉への影響など多岐にわたることが想定され、さらなる人口減少に拍車がかかり、町自体の存続が危惧される。

平成初期のバブル景気時代であれば、近隣市町村が行っているからと言って行政サービスを競い合ったり公共事業を投入したりすることに解決策を見いだしていたところかもしれないが、現在求められている解決策はそうではなく「多様な幸福」を暮らしの中で感じられ、人と共感しあえる心よりどころとして自然とともに永続的につないでいく町づくりである。

避けることのできない人口減少のなかにあってもあるべき幸福のカタチとしての「多様な幸福」は、人のつながりや日常生活の充実によるものでもあり、より実感するために生活と産業をつなぐため「地域に入って-into」「地域について（知り・学び・考えて）-about」「地域のために-for」を実現できるモデルとして太郎川公園の再生を目指す。

つまり、太郎川公園再生は、町の観光産業の基盤づくりであり、町の産業の基盤となる環境づくりである。太郎川公園を入口として「地域に入って、地域について、地域のために-into → about → for」による新たな価値観でのスモールビジネスを含めた産業の多角化を図っていくためのチャンスをつくり、将来にわたって人とつながり、日常生活の充実を実感する生活と産業をつなぎ多様性のある幸せづくりのための場である。

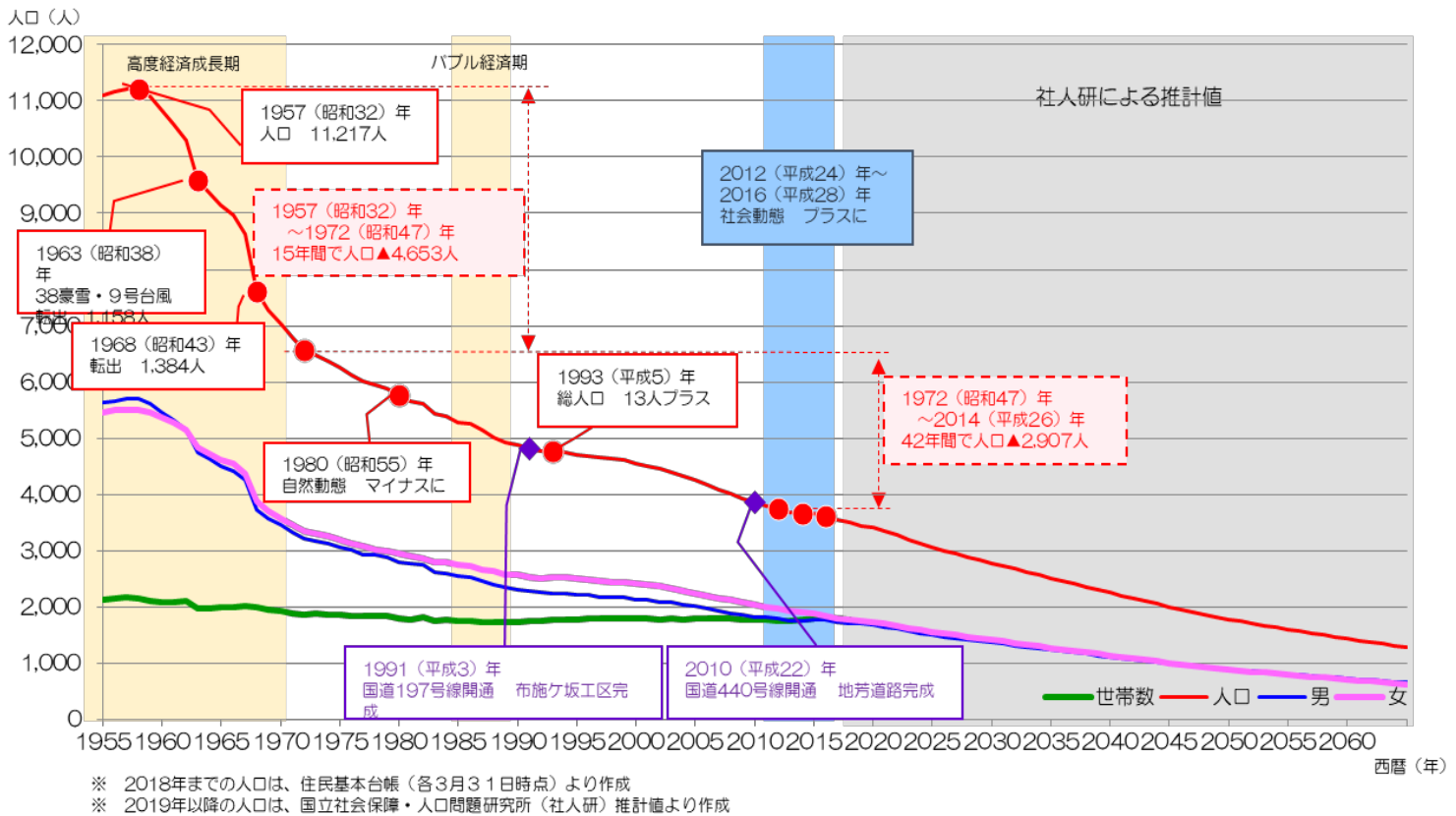
そのために太郎川公園に「買う（道の駅：役に立つ市場）」「泊まる（ホテル）」「食べる（レストラン）」「遊ぶ（公園）」「動く（二次交通）」すべての産業のチャンスを集約するとともに、関連する新たな産業につなぎ、継続的に稼げることが重要であり、本基本構想により方向性を示すものである。

【前提として】

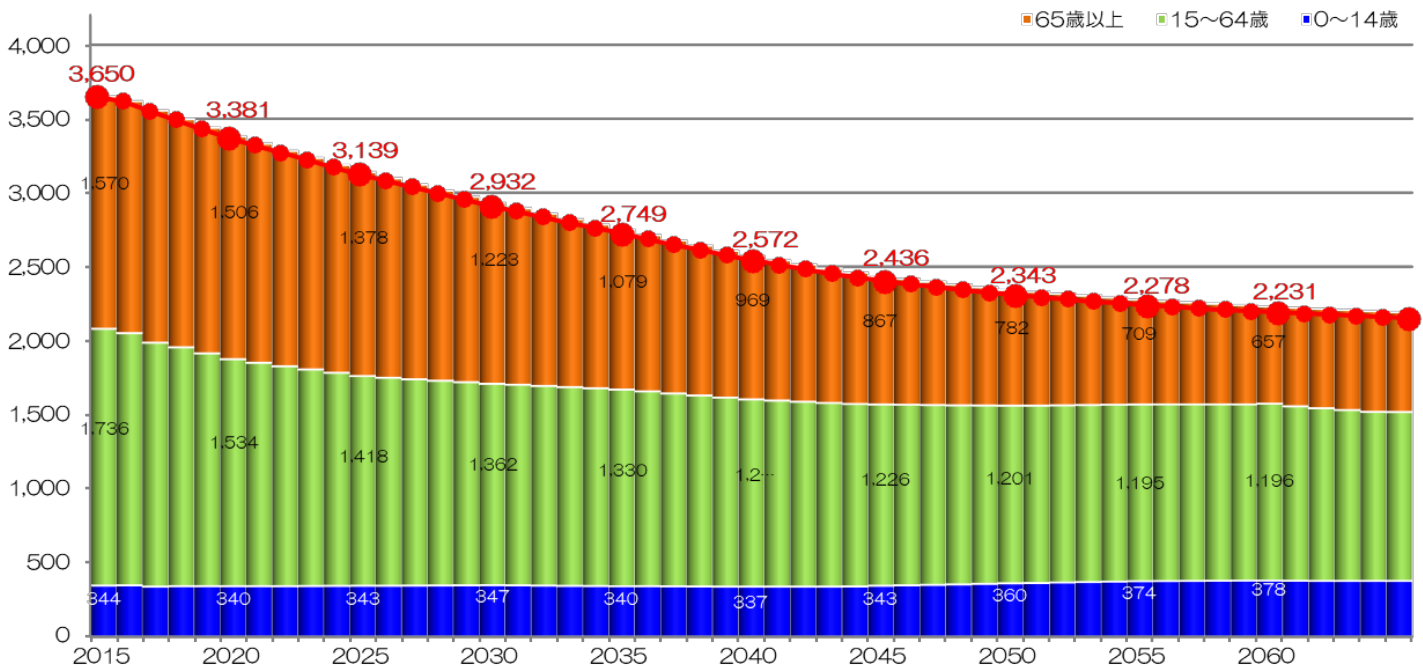
■人口構成

一 総人口の推移と将来推計

戦後、人口は増加傾向にあったが、1957（昭和32）年度末の11,217人をピークとして、その後ほぼ一貫して減少を続けている。特に1958（昭和33）年から1972（昭和47）年の15年間、高度経済成長期の都市部の旺盛な労働力需要や1963（昭和38）年に襲来した豪雪及び台風災害が影響し、4,653人が大都市へ流出。その後人口減少は緩やかになったものの、少子高齢化の進行により右下がり傾向は現在も続いている。2018（平成30）年までの61年間で7,720人減少。一方、世帯数は1957年の2,165世帯（5.2人/世帯）から2018年の1,770世帯（2.0人/世帯）となっており、核家族化とともに単身世帯、高齢世帯の割合が増えていると推測される。

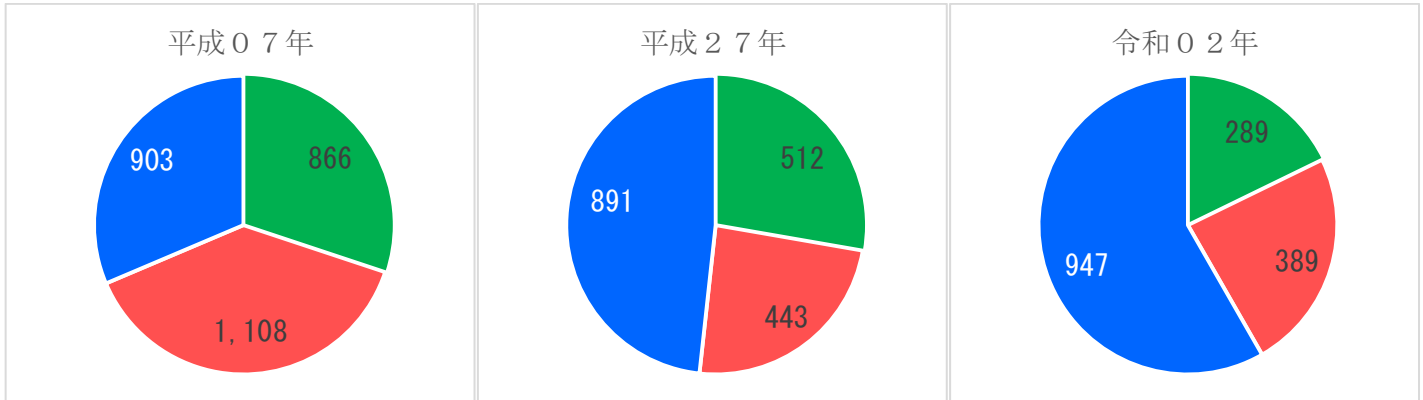


一 年齢3区分別の人口将来展望



■産業構成と町内総生産

一産業別人口比率 (■第一次産業 ■第二次産業 ■第三次産業 国勢調査データ 単位：人)



① 農業：622	408 (△214)	224 (△194)
林業：241	102 (△139)	64 (△38)
② 建設業：742	250 (△492)	211 (△39)
製造業：356	182 (△174)	173 (△9)
③ 卸売等：232	233 (+1)	242 (+9)

※卸売等とは、卸売業、小売業、宿泊業、飲食サービス業の合計 (国勢調査年度によって変化)

一町内総生産額 (■第一次産業 ■第二次産業 ■第三次産業 高知県 市町村経済統計データ 単位：百万)



① 農業：256	342 (+86)	249 (△93)
林業：262	334 (+72)	412 (+78)
② 建設業：1,862	1,466 (△396)	2,969 (+1,503)
製造業：844	1,252 (+408)	1,407 (+155)
③ 卸売等：509	550 (+41)	595 (+45)
宿泊等：383	523 (+140)	454 (△69)

※卸売等とは、卸売業、小売業の合計
 宿泊等とは、宿泊業、飲食サービス業の合計

第一次産業においては、就業人口の減少が見られるなかであって、生産額は横ばい（林業において増額傾向）にあり、効率化が図れていることが予想される。今後も継続し持続可能な産業として取り組むとともに、第三次産業の引き上げによる波及効果を期待できる。

第二次産業においては、製造業で今後、大きな増減はないものと予想されるが、建設業においては、人口減少に伴い生産額も減少につながる可能性も大いにあると思われる。

第三次産業においては、就業人口の増加がみられるが、生産額が伸びておらず、飲食・宿泊業を含めこの第三次産業でしっかり稼いでいくことが、今後重要となってくる。そうした第三次産業の効率化をはじめとする引き上げが、第一次産業及び第二次産業への波及効果につながり、町内総生産全体の引き上げにつながることを期待できる。

子々孫々に幸せな暮らしをつなぐ理想郷・栲原

鍵を握っているのは、栲原町にずっと暮らす人、そのために栲原町でずっと働いている人
そして栲原町ぐっとよって来てくれる人々、栲原町を愛してくれる人々
そんな多様な人々と築き上げる関係、気づき合える交流が
人と人をつなぎ、都市と栲原町をつなぎ、子々孫々に幸せな暮らしをつなぐ

【一人ひとりがキーマン】

栲原町のコミュニティとなる人とのつながりを再構築する場

「太郎川公園がある栲原町に行ってみよう」「大切な人と行きたいのは太郎川公園」
そういった想いを抱かせ、育み、持続させていく。

栲原町の魅力を高めていくだけでなく、町民、旅行者、企業など関わるすべての人々が
持続する地域の魅力を感じあえる町のシンボル【太郎川公園】

【社会的背景】

日本の人口問題の先の先に行く 栲原町の人口問題

2025 年問題

団塊の世代が 75 歳以上
超高齢化社会

2030 年問題

日本の人口の 1/3 が高齢者
生産年齢人口の減少
GDP の低下

2022 年に 3,300 人を下回る町人口
2030 年に 2,782 人予想

2022 年で約 1/2 近くが高齢者

2012 年からの 10 年間で生産年齢人口
450 人減少

—この先 10 年未満に起こってくる問題

労働力(担い手)不足

町内需要鈍化、経済停滞

商店等廃業

教育へ及ぼす影響

医療へ及ぼす影響

満たされない欲求

人口減少

拍車

町の消滅

Wellness YUSUHARA の実現

— 心身ともに健幸であり

取り巻く環境や社会的にも健康な基盤のうえ

豊かに輝ける人生を形成する

【共生と循環の思想】【絆】【経済の再生】

【6つの社会】 総合振興計画で2029年に目指す地域ビジョンの実現にむけた6つの施策の柱

健康	梶原ならではの保健・医療・福祉・介護が充実した社会
教育	自信あふれる梶原人を育てる教育の確立した社会
環境	次世代へより良い環境を引き継ぐ社会
産業	魅力ある生業の創出と地域を支える産業が発展した社会
くらし	助け合いながら暮らす社会
つなぐ	世界の人々とつながり支持され選ばれる社会

産業	<p>魅力ある生業の創出と地域を支える産業が発展した社会</p> <p>— 本町の魅力を生かし経済の再生へとつなぐため、インバウンド等を積極的に取り込むなど「観光産業」を創出するとともにその受け皿組織づくりをすすめます。 ※受け皿組織として「ゆすはら雲の上観光協会」を設立、今後の強化が必要 — 本町の観光拠点である道の駅ゆすはら・太郎川公園を再生します。</p>
----	---

町観光戦略	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減による地域内の消費損失をカバーするのは、交流人口の拡大（＝観光振興）による消費増 ・太郎川公園再生計画は、単なる公園整備、道の駅・ホテル整備ではなく、梶原町の産業活性化・地域消費拡大の切札
本町の課題解決	<ul style="list-style-type: none"> ・人口減少がもたらす顕在的、潜在的な課題解決に向けて将来的な人口減少を抑えつつ関係人口の増加を狙う。
観光産業への期待	<ul style="list-style-type: none"> ・観光立国を目指し2030年に訪日外国人観光客数6,000万人、旅行消費額15兆円の目標を掲げている観光産業において、ウィズコロナの新たな観光づくりへの期待（2022年時点では、円安をいかした稼ぐ観光地づくりへの期待）

すべてにつながる「人のつながり」の根幹にある人口問題と その人口問題解決の先にある地域ビジョンの実現に向けた実施モデル

- 太郎川公園を物理的な東の入口としてだけでなく、興味関心事の面でも梶原町への入口として「太郎川公園があるから梶原町」につなげていく。その切り口としては「健康」「教育」「環境」「産業」「くらし」など複数あるが、それらすべてに関わる「人（関係人口、交流人口、雇用）」に注目し、将来的に「太郎川公園があるから梶原町に住みたいな」につなげていく。
- 町民一人ひとりが思い描く幸福を実感できる心豊かな暮らしを持続している社会の実現。さらに太郎川や梶原町に関わる多様な人々が意義ある人生を生活している社会の実現のため、梶原町の象徴となる太郎川公園の再生を活用していく。

【太郎川公園について】

ふんだんな自然資源に囲まれて、梶原町の象徴となる公園(幸縁)

昭和 57 年から 5 か年計画で全町公園を旨とした花いっぱい運動とあわせ整備に取り組んだ太郎川公園は、昭和 59 年度に国土庁が山村の特性を高め、都市との交流を促進し、地域の活性化を図ることを目的とした「リフレッシュふるさと推進モデル事業」の指定(全国 4 か町村)を受け、都市との交流拠点施設として位置づけ、本格的に整備に取り組み、昭和 61 年 4 月 29 日に開園した。

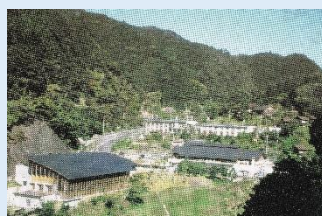
開園当初は、愛媛県宇和島市と高知市を結ぶ中間地で、交通の要衝でもあり、山間地に伝わる食料の加工実演・展示販売・特産品・土産品の販売を行うなど都市との交流拠点としてはもとより「身近な町民の憩いと安らぎの場」として多くの人に利用されていた。



社会情勢の変化に反応し公園整備を継続的に実施



平成 6 年には「雲の上のホテル・レストラン」「森林生態学習館」がオープンし、さらに「雲の上の温泉(平成 8 年)」「雲の上のプール(平成 10 年)」「雲の上のギャラリー(平成 22 年)」を整備するなど、運用開始後においても随時、社会情勢の変化に反応する形で公園整備を継続的に実施してきた。



【公園の現状と課題】

住民が感じている太郎川公園（観光関連産業等）に関すること

〔町民意見交換会・説明会〕令和元年7月～令和4年9月（18回実施）

- －再生は賛成 ーゼロベースに戻したことは評価、住民意見を聴いてくれるのも評価
- －ふるさと市場も再生計画に入れてほしい
- －太郎川公園を全体でとらえて、整備計画を立てるべき
- －梶原の何に重きをおいていくのか明確化してほしい
- －拠点として町内の人も使える施設に、憩いの場所に ー原点に戻って考えてほしい
- －家族連れをターゲットにすべき
- －トイレは何箇所かあるといい
- －百一草園との連携 ー野の花でいい × 花を植える、花が少ない
- －森林、木陰をいかしてもらいたい（ハンモック）
- －四季の変化を生かしたイベントを開く
- －フリーWi-Fi スポット
- －人材確保、人件費の問題
- －完成後の経営が心配
- －近年のレジャー施設やお子さんの関心所を調査していくべき
- －アスレチックは必要ない。自然をありのままに楽しんでもらいたい
- －アスレチック滑り台、ジップライン、トランポリン、ツリーハウス
- －もっと遊具が欲しい
- －キャンプ場があるのはいい × 迷惑行為、ごみ問題、西区とかぶる
- －梶原町のお土産品の充実を図ってほしい ー道の駅、物販、マルシェへの出品が少ない、調査が必要
- －以前のコンパクトにまとまっていた公園がホテル・温泉など建設した結果バラバラになっている
- －施設の一体感がない
- －隈研吾氏がやってくれることがいい × 隈研吾氏で呼び込もうとする考えは甘い、なんで隈研吾氏
- －ホテルは長期間観光のために必要
- －ヴィラリゾートのような一戸建ての感じが良い。
- －梶原らしく木を使って田舎らしく × 木にこだわりすぎると水回りとかメンテナンスが大変
- －接客力サービス力が必要
- －梶原に来て何を食べたいのか。これというものが無い。キジだけでうまいものではない工夫が必要
- －町内の美味しいものを食べてもらいたい。23時まで開いている飲食店があってほしい
- －宇和海のタイ、久礼のカツオ、地元食材だけでなくいろんな食材を集めて
- －コンビニ、スタバ、マクド
- －太郎川だけでなく町内の魅力ある場所でのつながり、何か仕掛けが必要
- －町中と太郎川シャトルバス（移動手段）
- －SNSなどでPR
- などなど

〔議会 太郎川公園再開発に関する調査特別委員会〕令和3年9月～令和4年2月（7回開催）

- －地域経済や地域活力の再生には施設群が必要不可欠。
- －ホテルが提供する「施設」「料理」「サービス」「周辺環境」についてお客様目線での検討が大事
- －ホテルのデザインは付加価値
- －地域の宿泊戦略を再定義し町全体で観光振興に取り組むことが重要
- －財政負担とリスク低減につながる検討が重要

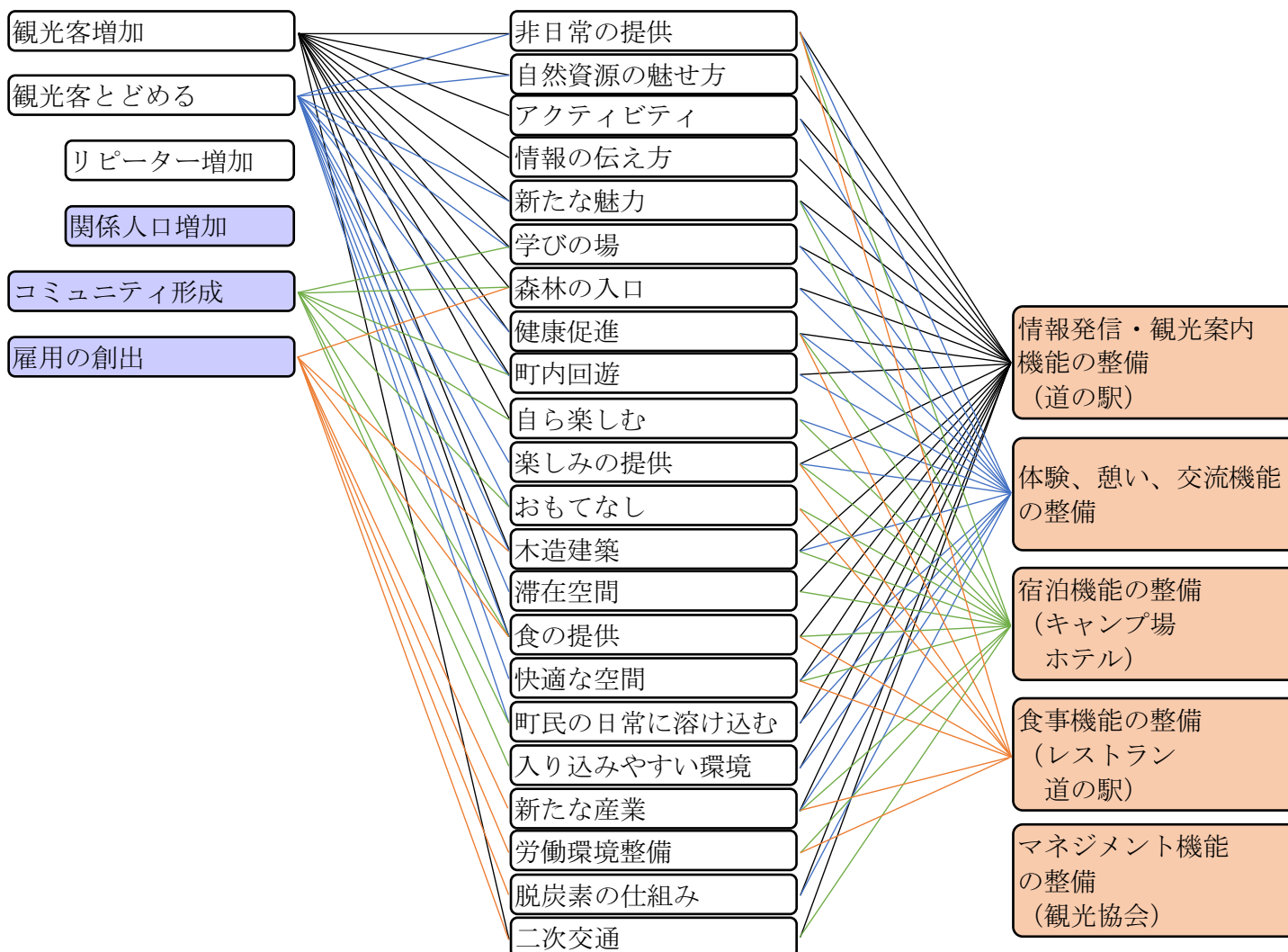
〔梶原町太郎川公園再生検討委員会〕令和3年10月～令和4年3月（8回開催）

- －観光産業の振興にとって不可欠な観光戦略を速やかに策定し、再生する施設や民間を含む既存施設、そして観光産業に関わる構図を明示すべき
- －町全体としてどのような姿を目指すのか、その中において再生する施設がどのような役割を果たすのか明確にすべき
- －目的や求める成果に対して適正な規模、かつ機能が最大限に発揮できる誰もが誇りに思える施設になることを望む
- －太郎川公園は、ホテル、レストラン、道の駅のみで成立しているのではなく、周辺森林、公園、温泉、プール、ふるさと広場など多様な環境、多くの施設が絡みあっているので、多角的、客観的な視点から検討をすすめること
- －再生事業全体の遅れが町民生活や町の経済にとって大きな影響をあたれることを考慮し迅速にすすめること

自然資源、施設群はあるものの 利用者ニーズへの対応不足と方向性の不明瞭で地域経済衰退危機

- ①利用者視点
 - 多様なニーズへの対応が遅れている。または不足している。
 - 提供者(町、指定管理者)都合になっていなかったか。
- ②維持管理費
 - 計画修繕対応とその都度修繕対応の使い分け
 - 増加する他の町有施設の維持管理費とのバランス
- ③行政の支援なしで事業に取り組む姿勢が少なくなり生産性が下降気味
 - ずっと続く限り、衰退を招くだけの危機(地域)
 - 財源確保と町内バランス(役場)
- ④目指す方向性
 - 自然や施設があれば、自然やその施設の使用目的を求めて人が来てくれると思ってなかったか。
 - 目指す方向性に沿った展開ができていたか。
- ⑤一步抜き出るモノへの特化
 - ④との絡みも含めた考え方の整理
- ⑥営業努力でなくマーケティング能力不足
 - ①④⑤につながるもの

太郎川公園に求められる機能の整理



共通する価値観と可能性を磨き
持続可能な幸福感に包まれた人のつながりをつくる



梶原町への入口として
公園の魅力を活用し、人々の関心を高める

【人が資本であり資産】

梶原町のまちづくりを構成するモノ



梶原町に関わる人たちの幸せを構成するモノ



資本として資産として“人”が必要

いなくなると梶原町が困る存在であり
そのために今・・・
太郎川を拠点とした産業の確立が必要

新しい【価値観】を取り入れ共通の価値観として
資本となる“人” 資産となる“人”を確保し
将来につなげていく

【太郎川公園を使って実現したいこと】

交流から関係へ。そしてゆすはら愛、ゆすはら暮らしへ

- 太郎川公園という場所を活用して「コミュニティを醸成」していく。
- 梶原町にずっと暮らす人、ずっと働いている人、ぐっとよって来てくれる人たちによる新たな経済循環の構築
- 梶原町に賦存している価値、太郎川公園のポテンシャルを引き出し、人流の活性化による新たな出会いや就労機会につなげていく。
- 生の体験を強烈に与えることで、ココロに残る梶原町。

「三世代交流の場」「町民の憩いの場」「森林の入口」「環境学習の入口」という多面的な機能を有しており、学びや遊び、体験を通じて本町の取り組みや暮らしを知って、たくさんのモノを消費する暮らしから、モノづくり（林業、エネルギー、起業）もふくめ充実したゆすはら暮らしへつなげていく。



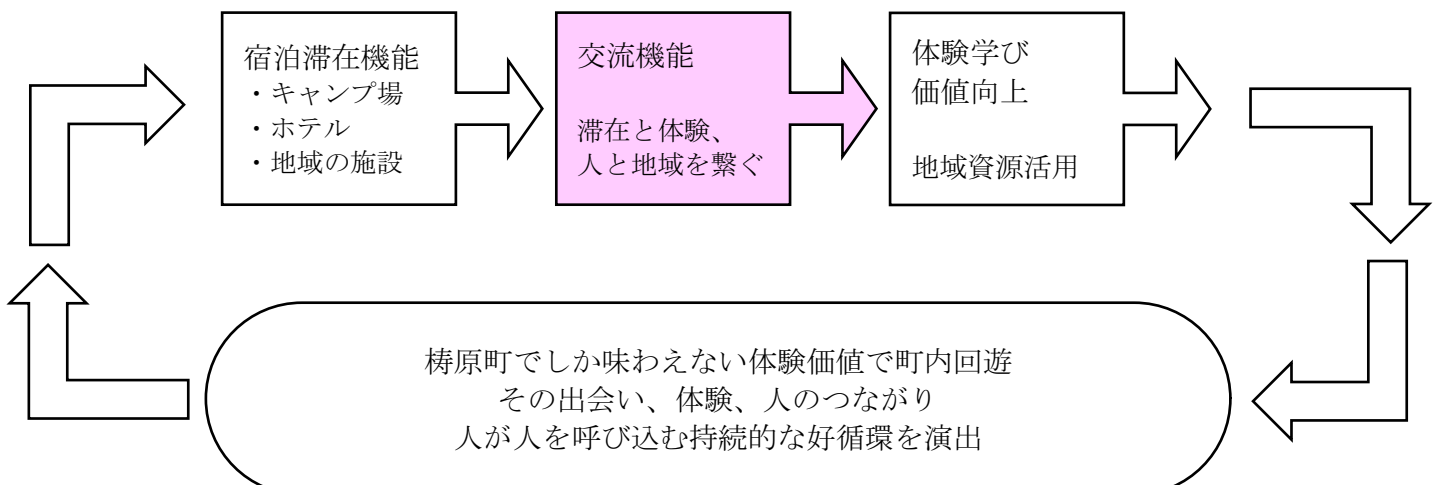
暮らす人、働いている人、関わる人すべてが活躍できる

- 梶原町に暮らす人、働いている人だからこそ知っている体験を提供。
- 太郎川公園での「森林の入口」「環境学習の入口」だけでなく、地域に入りこむからこそわかるさらに深い体験、楽しみ方で町内回遊できる梶原町での滞在と関わる人たちの自信と誇りを提供。
- 活躍できるすべての人とぐっとよって来てくれる人との win-win を構築し、その先の定住にもつなげていく。
- あらたな産業の創出や誰もが参画しやすい環境も整えていく。
- 一人ひとりの心地よさ、生きがいづくりの実現。一人ひとりが主人公となり地域で経済を生み生産性を高めていく。

情報発信・観光案内機能を整備し町内回遊の窓口として役に立ち続ける市場

「見る・食べる・遊ぶ・買う・泊まる・感じる」が揃った太郎川公園と地域や暮らす人をつなぐ拠点施設【道の駅】

- 梶原町のコミュニティの核となる拠点施設として、さまざまな体験や学び、イベントを通じて太郎川公園だけでなく、町内回遊の起点施設。
- 多様化するニーズへの対応を可能とし、町内回遊（場所だけでなく食の魅力）も含め梶原のブランド力を高めそのイメージを暮らす人、働いている人、ぐっとよって来てくれる人のなかに強くすり込む情報発信力。
- さまざまな梶原を体験し長く滞在しようと思わせる情報発信力（期待に応えられる梶原づくり）。
- 「誰」に「何」を「どうやって」買ってもらうだけでなく、つないでいくことになる拠点施設。



役に立ち続ける市場

地域や暮らす人と連携した拠点施設で人とのつながり

■道の駅

そのままの栲原をまるごと詰め
暮らす人、働く人、訪れてくる人
すべての人々の役に立つ市場

都市と栲原、人と人、太郎川と地域、すべてをつなぐ道の駅

令和の茶堂づくり

客人信仰（おもてなしの心）を受け継ぎ
情報収集と情報発信による思想の交流を大切にして
新たな発想とビジネスチャンスを逃さず生かす

売上高1億2,400万円を目指す道の駅
商品は地域の生産者さんがつくられたお野菜や加工品
陳列されているのはそうかもだけど
みんなに食べてもらいたいという気持ちなど
生産者さんの想いやバックストーリーを含めた

【地元の生産者(作り手)が商品】
それが伝わる市場スペースの魅せ方も

その運営(経営)は
町内の人々が携われるカタチが理想であり
各集落活動センターとの連携を図りながら
消費者視点を意識して作り手とともに考え実施

太郎川にとどまらない町内全体への回遊を促す拠点施設
ふるさと納税(返礼品)やネットストアをあわせて
栲原のブランド力を高めていく

「令和の茶堂」にとって、大事なポイントとして
思想の交流から生まれた
新しい価値観を取り入れ共通の価値観として
新たな仕事、新たな雇用の場が増えている
10年後の栲原町



非日常を楽しめる空間

太郎川公園の自然の中で

和の佇まいに浸ることのできる特別な日を過ごす

■食事施設・宿泊施設

日本の原風景に住まうように泊まる
なつかしさに包まれ
ゆっくりと流れる時を楽しむ

和の泊まれるレストラン

百年の宿づくり

経年変化を味わう情緒と将来ニーズへの変化を楽しめる
国内旅行者、国外観光客の両者共通の魅力となる
栲原町だからこそこの「木造建築」へのこだわり

お部屋は12室と離れを5棟とし
施設の「見た目」だけでなく
質の高い接客(接遇)を意識した精神的な価値も提供
対価に見合うその価値に満足する(アップーマスから)準富裕層

視覚からも「美食」を味わえるお料理は
専門家が監修(メニューづくり)した
栲原の四季を五感で堪能できる地域食材(近隣含め)を活用し
新たな価値を付加していく食

「食」＝「人」＋「良」

「食物」＝food＝「風土」(風と土の関係)

その運営(経営)は
利用者視点で満足を考えられるホテル経営の専門家
地元雇用も含め
永続的な品質確保を目指し将来につながる人材育成
当初から(特別)修繕引当金等を計上するなど
行政の支援なしでも事業に取り組む姿勢によって
地域で経済を生み生産性を高められる運営(経営)

「百年の宿」にとって、はずせない大事なポイントとして
「前雲の上のホテル」を超えた年数の30年後に
本当に町民が「百年の宿」に対して高評価をしている状態を目指す

道の駅、食事施設、宿泊施設自体の雇用の創出は当然

栲原で楽しいコンテンツを体験し長く滞在しようとする状態をつくり
その滞在期間の「食べる」「動く」「買う」「遊ぶ」すべてに産業のチャンス
地元だからこそこの新たな魅力ある仕事や役割が生まれ新たな人の流れができる



【機能／計画 比較】※内容は、構想時点であり、今後の状況によって変更する可能性がある。

	現道の駅	新道の駅構想
ターゲット		日帰りでもいろいろ体験したい人
単価		2,000円（物販＋飲食）
飲食席数		50席（損益分岐）
収入		1億2,400万円（物販＋飲食）
運営		三セク＋町民
必要な人材	－	マーケター
必要な視点	－	町内回遊につなげられる 思想の交流をビジネスチャンスにつなげられる 梶原町への入口として興味関心、魅力を多角化し、町内総生産の底上げにつなげられる
成功のカタチ		令和の茶堂 客人信仰を引継ぐおもてなし＋情報収集だけでなく、発信と吸収により新たな仕事、新たな雇用が生まれる 毎年度（でなくても累積で）黒字の状態
効果		生産者の潤い、一次産業や加工品事業の継続とあわせて新たな加工産業が生まれる、町内に人の還流
その他		名物をつくる 物販＋飲食＋加工所＋案内所

	前雲の上のホテル	新ホテル構想
ターゲット	－	準富裕層（年収800万円以上）
客室数	16室	12室＋ヴィラ5棟（段階的に拡張）
定員数	42人	24人＋20人＝44人
単価		25,000円（宿泊のみ、季節変動なし）
稼働率	Max52%/年	55%
収入	Max7,464万円/年(H19) Min2,977万円/年(H06)	3億492万円/年
運営	指定管理：町内事業者	三セク＋運営会社（委託：外部専門家、町内雇用）
必要な人材	－	専門家（コンテンツ開発）
必要な視点	－	外の評価を理解できる人、客観的に評価できる人
成功のカタチ		リピーター増、予約サイト中四国1位 or アワード獲得 観光消費額5万円、建築として将来レガシー（100年以上続く）
効果		新しい産業、新しい雇用の創出
その他		段階的な客室増加（若手建築家×隈氏の仕組み）

	前雲の上のレストラン	新レストラン構想
ターゲット	－	ホテル宿泊客
席数		12テーブル
単価		8,000円～10,000円（宿泊者のみ）
収入	Max1億3,407万円/年(H08) Min 3,677万円/年(H19)	7,000万円/年
運営	指定管理：町内事業者	三セク＋運営会社（委託：外部専門家、町内雇用）
必要な人材	－	セントラルキッチンをプロデュースできる人（メリットとして梶原の名物メニューのプロデュースも） やる気のある人（その後の人材にもつながる）
必要な視点	－	梶原町だけでなく近隣地域も含めた食材での食事をコーディネートする力、ヒット商品（名物）をつくる
成功のカタチ		セントラルキッチンから派生した飲食店が町内にでき、その先にリピーター増（また梶原にご飯を食べに来たいと思ってくれる）
効果		加工等の雇用の発生 （通信販売やふるさと納税の製品としても活用）
その他		町民を含めた道の駅利用者には、道の駅に50席

選択できる宿泊のカタチ

需要が高まっている屋外滞在も太郎川公園だからこそ

■キャンプ場

自ら楽しみたい人には
自然に囲まれ、自然と一体化した
自分たちだけの空間を楽しむ

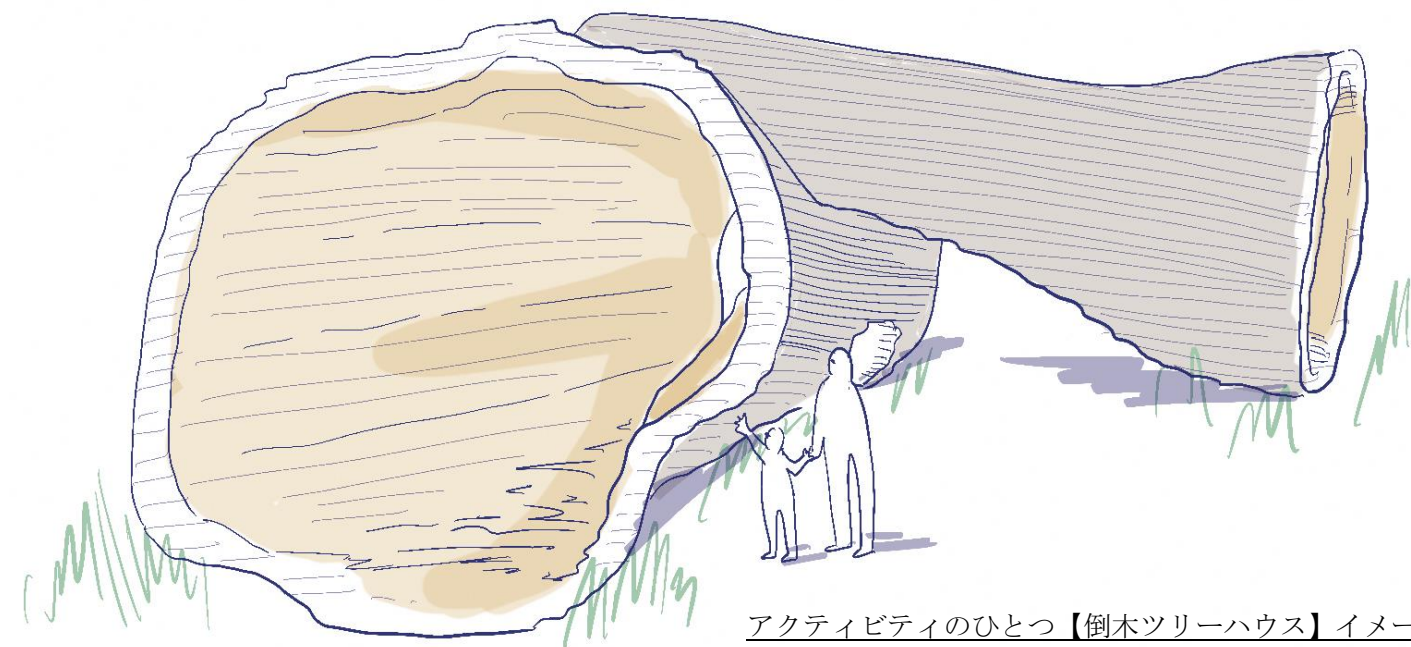
太郎川の自然に泊まる

キャンプサイト

人と自然が融合し
そのなかで遊びを通じた体験
自分たちでいろいろできる実感を得る

キャンプサイトの多様性(芝生、デッキ)
キャンプ人口の増加に伴う多様なニーズへ対応
レンタル品の充実で誰もが楽しめる
アウトドア体験と併せて町内の自然資源、森林との連携
森林セラピーなど、都会の人がイメージしている森林
森のスペシャリスト(管理官)が魅せられた森林
そういった森林の回遊の拠点

ファミリー層のキャンプでは「食」もイベント
記憶に残るキャンプ飯だからこそ
道の駅がある強みを生かして
道の駅での食材選び調達から
簡単な調理、最後の後片付けまで子どもとともに体験することで
子どもの食への好奇心と望ましい食習慣の食育につながる



アクティビティのひとつ【倒木ツリーハウス】イメージ

「つかう」「つなぐ」「つくる」

太郎川公園を拠点として森林と遊び、森林に学ぶ体験が
将来の地域人材づくり

■アクティビティ①

子どもには敏感に伝わるからこそ
大人も本気で楽しめる
体験型アクティビティ

担い手育成の場にもつながる

林業体験プログラム

森林からつながる木づかい
林業、木工、木造建築、モノづくりへのつながり

森林資源を利用する林業体験によって森林の意義を感じてもらおう
地域の若者が地域資源を守り
有効利用しながら豊かな生活を実践するための拠点
素材生産だけでない新しい林業によって
地域産業を守る【担い手育成の場】として活用

■アクティビティ②

安定した集客のため
ファミリー層の獲得
小さな子どもでも楽しめるイメージ

木にふれ、木に学び、木と生きる

木育からアスレチックへ

ぬくもりを肌で感じ、音を聴き、匂いに安らぐ
木のおもちゃで育つ感性
成長とともに木のアスレチックでより行動的に楽しむ
手作り体験で世界にひとつだけ自分だけの木のおもちゃも

木であるがゆえに傷みは早い(デメリットかも…)
だからこそ新たなアスレチックへの変更も早い(メリットになるよね)
林業体験プログラムと併せたアスレチックづくりで
変更のサイクルが早くても安価に対応
その他にも【水遊びの場】【ツリーハウス】【ネット遊具】など公園の象徴となる遊具も検討

キャンプサイトとともに官民連携での持続可能な運営管理体制
太郎川の可能性を最大限に引出し、そして活用
地域おこし協力隊など外部の新たな価値観を共通の価値観とする仕組みづくり



自然の素晴らしさ

癒される憩いの場で、生命の大切さを感じられる

■湿生植物園

連続テレビ小説「らんまん」にあわせた整備
その後の持続的な集客に向け
歩きたくなる植物園

自然との共生

観たくなる植物園

湿生植物園もあるから観ていってください
というより
湿生植物園があるから観ていきたい
そう思える植物園

観る人と観られる植物

人と自然をつなぐ場であり

その自然の素晴らしさ保全の大切さを感じる場だから

将来世代に持続可能な自然環境をつないでいく意識

自然の恵をエネルギーに

成長につながる体験だけでなく成長につながる学びがある

■学びの場

森林、自然そのものだけでなく
それを活用したエネルギー
共生と循環の思想を学ぶ

脱炭素に取り組む先行地域ならではの

木質バイオマス発電所

発電の仕組みだけでなく
その背景として森林整備や
森林の多面的な機能による梶原の暮らしを学ぶ
エネルギーの活用による梶原の脱炭素への挑戦を学ぶ

排熱利用の「雲の上の温泉」「雲の上のプール」を利用
恩恵を感じる健幸づくり

地域エネルギー公社を通じたエネルギーマネジメントで町民の暮らしの質向上にもつながる



太郎川公園に伴う地域への波及効果

物を見て山に遊ぶ【物見遊山】だけでなく 循環につながる経済の再生

- ー地域経済波及効果を高め、持続可能な公園管理経営を期待。
- ー交流人口の増加と経済波及効果の循環の仕組み。

■太郎川公園施設群の利用者数 2024年に183,000人(49,000人増)
※梶原町まち・ひと・しごと創生総合戦略(2020年)

令和3年度県外観光客入込・動態調査報告書(高知県)による
宿泊客消費額平均:26,202円/人
※想定日帰り客消費額平均を約1/6の4,500円/人とする。

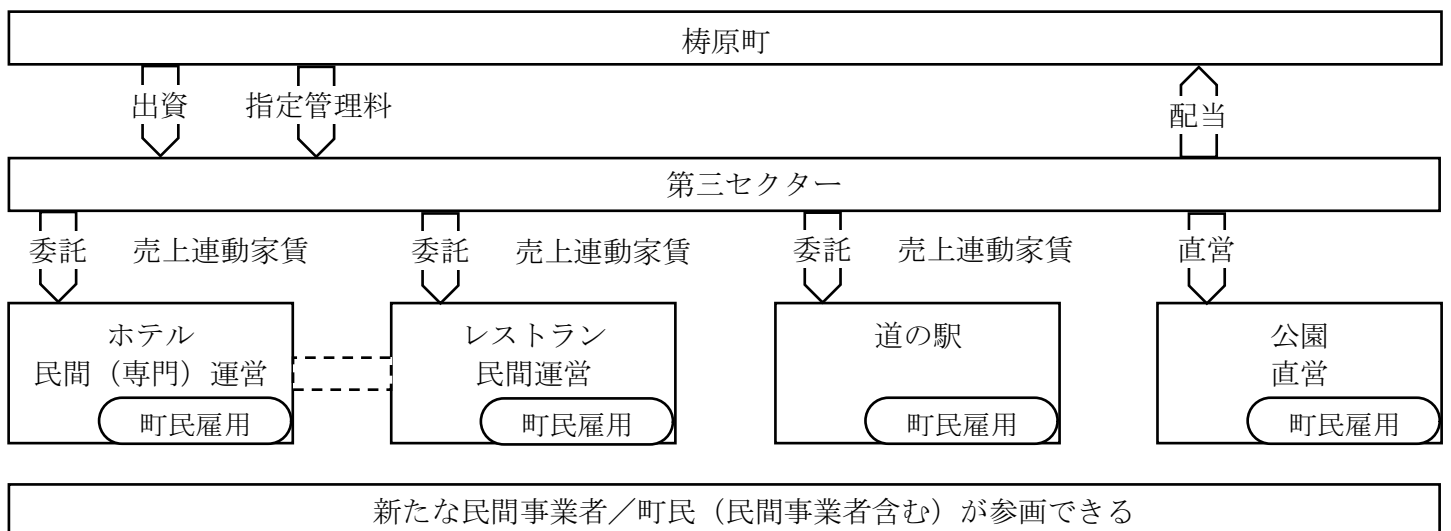
日帰り客 45,000人増 → 2.0億円
宿泊客 4,000人増 → 1.0億円 計3.0億円

■交流人口数 2024年に326,000人(87,000人増)
※梶原町まち・ひと・しごと創生総合戦略(2020年)

日帰り客 80,000人増 → 3.6億円
宿泊客 7,000人増 → 1.8億円 計5.4億円

- ー単純に、計算どおりになるものでなく、今後の状況によって変更する可能性が大きな数字ではあるが、利用者負担の増加、使用料などによる新たな収入を確保。
- ー太郎川公園施設群のさらなる魅力への投資、施設修繕積立等の施設群の経済的な自立を目指していく。

暮らす人、働いている人、
ぐっとよって来てくれる人々、愛してくれる人々が
新たに参画しやすさを整備



- ー全体マネジメントには町が関わることで、民間(専門)事業者の思いだけにせず、地域との関りを含めた町の思い(時代の変化に応じた)を反映
- ー町民を含めた新たな事業者が参画できる仕組み(2nd step以降を含めて)

“人のつながり” で生れる 新しい【価値観】を取り入れ共通の価値観として磨く地域性

		役場（町民）	
		（気づいている）	（気づいていない）
利用者	（いない）	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者が気づいていないニーズに役場（町民）が気づいている <p style="text-align: center;">地域の価値の提供</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者も役場（町民）もニーズに気づいていない <p style="text-align: center;">新たな価値</p>
	（いる）	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者も役場（町民）もニーズに気づいている <p style="text-align: center;">当然実施</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者が気づいているニーズに役場（町民）が気づいていない <p style="text-align: center;">手遅れになる前に対応</p>

- －異なる価値観は、これまでの栲原町にない価値観の可能性があり、新たな風となる（風と土の関係）
- －栲原町の成長につながる新たな価値観
- －暮らしている人の「当たり前」が新たな価値観で観光の成果につながり、観光の成果が暮らしている人の取り組みにつながる好循環にも期待

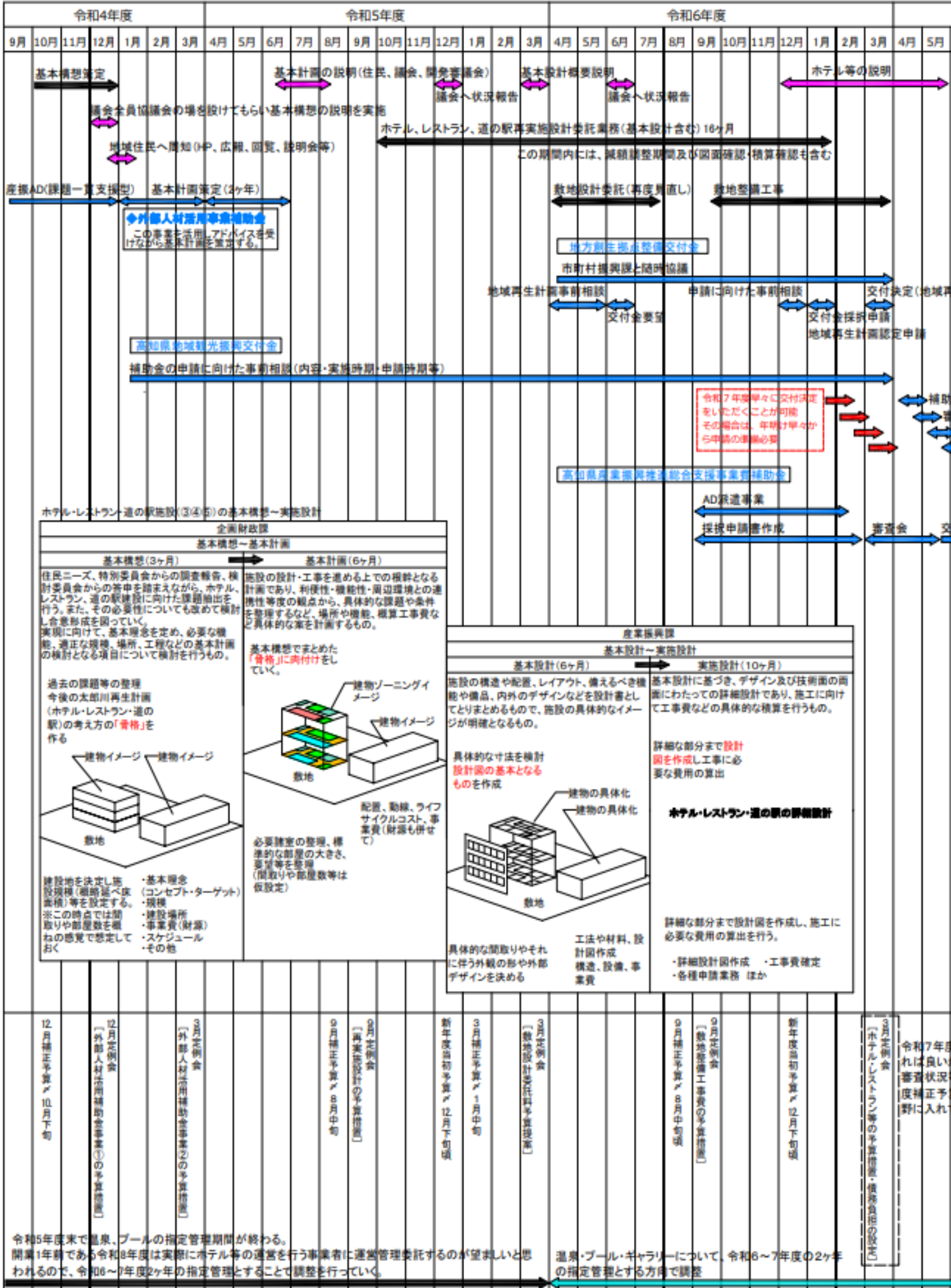
ソフトとハード両面で実現する

“人” を大切にし

“人のつながり” で持続可能な栲原町へ向けた太郎川公園モデル

ソフト面（管理ほか）	ハード面（施設整備ほか）
<ul style="list-style-type: none"> －町内回遊による地域経済の再生 －コミュニティの醸成 －新たな産業が参画しやすい環境 －暮らす人と働いている人、ぐっとよって来てくれる人の三方よし －質の確保 －雇用創出、雇用確保 －「見た目」でなく目に見えない仕組みづくり <p style="text-align: center;">（財源）</p> <ul style="list-style-type: none"> －国・県の制度を最大限活用した財源づくり －金融機関等との連携 	<ul style="list-style-type: none"> －情報発信、観光案内機能を整備し町内回遊の窓口として役に立ち続ける市場づくり <p>【道の駅の整備】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業費規模 6 億円を想定 ・施設規模 800 m²（うち市場 300 m²）を想定 <ul style="list-style-type: none"> －和の佇まいに浸ることのできる特別な日を演出できる施設づくり <p>【食事施設、宿泊施設】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・事業費規模 12 億円を想定（+外構等 5 億円） ・施設規模 1,020 m²（食 170 m²、宿 850 m²） <ul style="list-style-type: none"> －選択できる宿泊のカタチ <p>【キャンプ場】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和 3 年度事業実施中 <ul style="list-style-type: none"> －安定した集客のためファミリー層獲得、三世代で楽しめるイメージづくり <p>【アクティビティ】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和 4 年度設計委託中 <p>【湿生植物園等】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・令和 4 年度事業実施中 <p>※内容は、構想時点であり、今後の状況によって変更する可能性がある。</p>

【スケジュール】



令和7年度 令和8年度 令和9年度

6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月 4月 5月 6月 7月 8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月

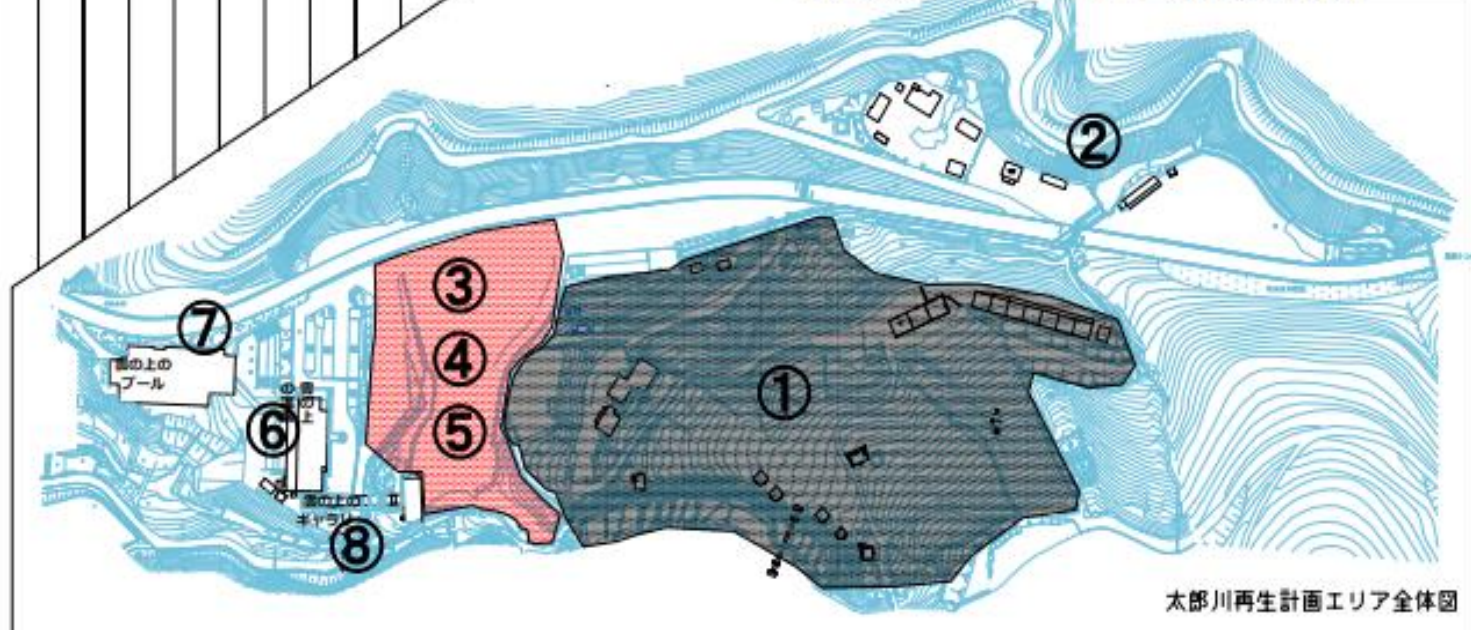
ホテル、レストラン、道の駅建築工事
 開業準備
 2027年7月オープン
 目標は6月議会に工事請負契約の議案提出。場合によっては臨時議会をお願いする。県への申請、審査の状況によりずれ込む場合有

(再生計画認定)

金採択申請
 採択決定
 交付申請書の提出
 審査交付決定

付決定～採択決定～交付決定

施設名	運営状況	整備の方向性
1太郎川公園	運営	基本構想等をもとに施設整備を実施
2ふるさと広場(くまのき、ふるさと市場等)公園	運営	既存施設の活用、適宜修繕
3館の上のホテル	-	-
4館の上のレストラン	-	ゼロベースから見直し中
5館の駅前すばら	-	-
6館の上の温泉	指定管理	既存施設の活用、適宜修繕、大規模修繕
7館の上のプール	指定管理	既存施設の活用、適宜修繕、大規模修繕
8館の上のギャラリー	指定管理	既存施設の活用、適宜修繕
9ワイダースイン線の上	運営	既存施設の活用、適宜修繕



太郎川再生計画エリア全体図

当初予算で計上でき
 が、説明状況、申請、
 等によっては令和8年
 算で対応することも視
 ておく

令和9年度からの運営が開始されることを考慮し、令和8年度からの指定管理とする

【参考】

資本となる“人”資産となる“人”を確保し【子々孫々に幸せな暮らしをつなぐ理想郷・梶原へ】のために

一 梶原町総合振興計画及び梶原町まち・ひと・しごと創生総合戦略（2020年）によるKPI

〔人口展望値〕

2060年：2,231人（R04.09末3,270人）

2029年：2,973人（総合振興計画期末）

2024年：3,187人（総合戦略期末）

〔移住者の受け入れ〕

2020～2024年：40人

〔交流人口〕

2024年：326,000人（H30年239,000人）

〔太郎川施設群入込客数〕

2024年：183,000人（H30年134,000人）

〔太郎川公園再生を含む観光産業への新たな就業者数〕

2024年：30人

〔住民による新たな起業支援〕

2020～2024年：5件（H30年1件）

一 太郎川公園再生によるKPI

〔観光消費額〕

2029年：50,000円／人（宿泊含む）

（R03年県外観光客入込・動態調査報告書（高知県）による高知城（最高値31,101円）の1.6倍）

〔観光客の満足度〕

2029年：宿泊先85%、観光地85%、観光案内所80%（高知県目標値）

〔ホテル稼働率〕

2029年：55%（前ホテル3年目の稼働率52%）

〔ホテルリピーター率〕

40%（5割強が30%未満とも言われているなかで、ホテルだけでなく町内回遊とあわせる魅力）

〔道の駅売上高〕

2029年：124,000,000円／年（平均消費額1,000～2,000円／人）

レジ通過入込客について、道の駅「布施ヶ坂」（15.6万人）との交通量等を比較勘案し12.4万人をめざす。

【顕在的な課題】

- ・ 既存ホテルの取り壊し等により、不足している宿泊施設（短期的な課題）
- ・ 資材高騰による再検討（短期的な課題）

※ 町としての生き残りが厳しいことが容易に予想される（中長期的な課題）

【公園のみ】 通過するだけで利益の限定



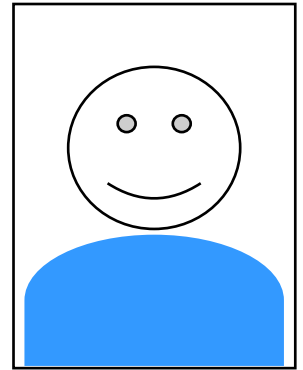
【太郎川にホテルがあることで】 滞在し、地域全体に利益



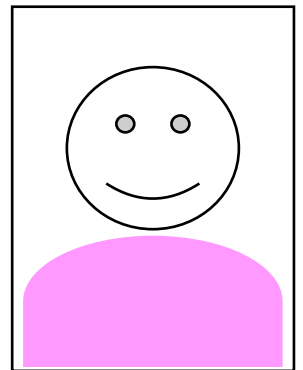
- ・ 関連する事業も含めた仕事と雇用の増加による好循環の地域経済の持続可能性有（中長期的な課題解決）

【2030年新たな栲原人の人物像】

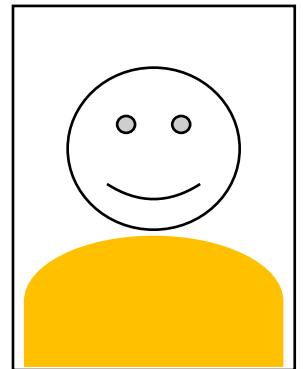
- ・栲原 新太
- ・33歳
- ・男性
- ・飲食サービス業（起業）
- ・栲原町内（空き家住宅）在住 ※31歳の時に移住
- ・妻（30歳）、長男（3歳）、長女（1歳）
- ・年収 740万円（所得 100万円）
- ・将来的に自然に囲まれた環境で子育てしたいと考え、長男出生を機に移住して現在、子どもたちと栲原での生活を楽しんでいる。
移住とともに飲食サービスを町内でOPENし
休日には、栲原巡りを繰り返し、町外からのお客さんにおすすめをすることも楽しみになっている。



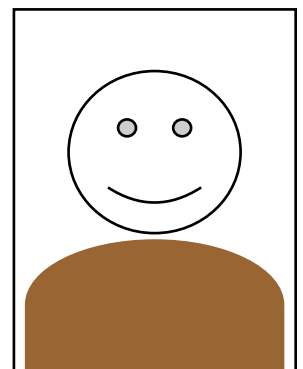
- ・栲原 愛
- ・38歳
- ・女性
- ・林業（協力隊）
- ・栲原町内（空き家住宅）在住 ※35歳の時に協力隊員として移住
- ・夫（36歳）
- ・年収 210万円（所得 140万円）
- ・協力隊として3年が経過しようとしており、今後も栲原で木に関わりながら暮らしていきたいと思っている。
休日には、町内の木工職人の作業場に行き趣味としての木工を楽しんでいる。



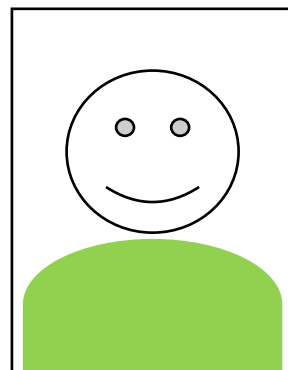
- ・雲野 羽恵
- ・41歳
- ・女性
- ・雲の上ホテル勤務
- ・栲原町内（町営住宅）在住 ※ホテル開業当時にスタッフとして移住
- ・夫（41歳）、長男（12歳）、次男（10歳）
- ・年収 250万円（所得 150万円）
- ・栲原町内で古民家をリノベーションして、自分で宿泊業の開業を考えている。
移住コーディネーターを介して古民家を巡ることが休日の楽しみとなっており夢を膨らませている最中。



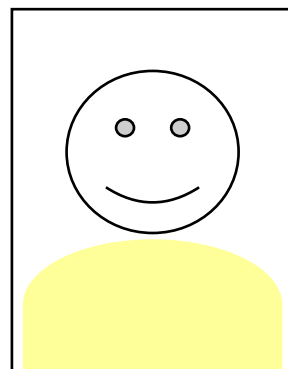
- ・栲原 久良志
- ・28歳
- ・男性
- ・建設業
- ・栲原町内（町営住宅）在住 ※高校入学時に栲原町へ
- ・妻（27歳）、長女（2歳）
- ・年収 270万円（所得 180万円）
- ・栲原高校へ入学したことで栲原での暮らしを選択し、町内建設業者へ就職
子育てしやすい環境をありがたく感じ、栲原でよかったと思っている。
休日は町外へ出かけることが多いが、子どもが育つなかで太郎川公園にも遊びに行っている。



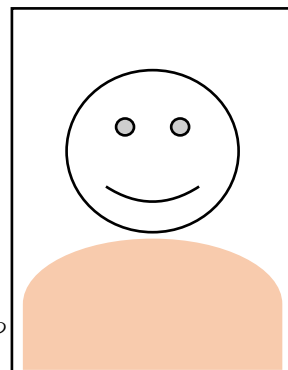
- ・森賀好生
- ・58歳
- ・男性
- ・林業
- ・梶原町内在住
- ・妻（60歳）
- ・年収 750万円（所得 75万円）
- ・先代から町内で林業を生業としている。
子どもたちは、町外に出ておりUターンする意思も少なく、自分たちの生活のために林業をしているといった感じ。
晴耕雨読でなく晴山雨読を楽しんでいる。



- ・賀留須斗
- ・30歳
- ・男性
- ・公務員
- ・梶原町内在住
- ・単身
- ・年収 360万円（所得 240万円）
- ・梶原に生まれ育って、大学進学で一旦町外へ出ていたが、卒業とともに梶原へ役場に就職して数年が経ち、町の課題が将来どうなるかということにも気がまわりはじめています。
休日には、お出かけすることが多く、そこでの気づきも仕事で生かせないのか模索中。



- ・三宜陽
- ・42歳
- ・男性
- ・キジ生産者＋農業
- ・梶原町内在住
- ・妻（41歳）
- ・年収 450万円（所得 180万円）
- ・梶原の名産づくりにキジを活用したいと熱意をもって、キジ生産を始めている
町外との取引が多く、需要がある商品ということで自らのキジ生産に自身を持ち取り組んでいる。
妻とのお買い物ついでに外食する時には、その料理にキジ肉を使えばどうなるかを考えてしまう。



- ・福豪
- ・66歳
- ・男性
- ・畜産＋農業＋年金
- ・梶原町内在住
- ・妻（66歳）
- ・年収 1,400万円（所得 100万円）
- ・道の駅への出荷や新たな食事施設との取引が順調で、定年後に始めた畜産と農業の複合経営を楽しんでいる。
ある程度の初期投資をすまし、今後儲けも増えてくると見込んでいる。
休日という概念はないが、生きがいのある人生を送っている。

